

コミュニケーション能力とSLA研究

佐野 富士子 (駿河台大学助教授)



近頃の“17歳の犯行”を聞くにつけ、なぜそこまでストレスをため込んでいたのだろう、なぜひとりで悩んでいたのだろう、なぜ悩みを誰かに相談しなかったのだろう、と思うとやり切れない気持ちになる。気持ちが押しつぶされているときは問題の整理ができず、人に伝えることができないものではあるが、自分の苦しい気持ちを表現する技術を身につけていない子どもたちが、自己アピールしたい欲求、認められたい欲求を満たすことができず、親にも教師にも打ち明けられず、ひとり悶々としていたと思うと本当に心が痛む。

このように、日本語でさえ効果的にコミュニケーションすることは難しいのであるから、外国語でそれを行うのは更に難しいにちがいない。しかし幸いなことに、近年応用言語学が盛んになり、特に第2言語習得論(SLA)は領域の広がりと共に様々な成果を出してきている。そこから示唆が得られるかもしれない。例えば、コミュニケーション能力は、1) ことばの形に関する規則を正しく使う能力(文法能力)、2) 社会的、文化的に適切なことばを使用する能力(社会言語学的能力)、3) まとまった話をしたり書いたりする能力(談話能力)、4) 自分の英語力の不足を補ってコミュニケーションする能力(方略能力)、の4つの要素から構成されているとする説が最も有力である。日本語でのコミュニケーションにもこの知識を転移させて、より効果的にはできないものだろうか。

例えば、文法的には正しくても何を言わんとしているのか意図がわからない文章を書いてしまうケースには、出来事が起こった順に説明する、例示を用いてわかりやすく説明する、意見の表明と共にその根拠や理由を示す、などの指導が有効であろう。会話の場面でも a) ただ please を付ければ丁寧な依頼表現になると思込み、相手に応じた適切な依頼表現を使えない、b) 謝罪表現になぜ謝らなくてはいけない状況に陥ったかの説明が添えられていない、c) 誘いや申し出の断り方が適切でないため相手に誤解を与えてしまうなど、意図したことが伝わらないケースには、コミュニケーションの4要素、特に相手の社会、文化における会話規則/文章構成規則、問題解決の方略を知識として与え、実際にことばとして使ってみるようにさせることが有効であろう。

このような授業を英語の時間に行うと、日本語にも意識がおよぶようになり、普遍的なコミュニケーションの原理が見えてくるのではないだろうか。コミュニケーションには発信者と受信者がいるので、互換性のあるコミュニケーション・ツールとルールを用いること、自分のメッセージを相手が理解できるかどうかを想像してみることで、相手の言わんとしていることをわかろうとする積極的な気持ちをもつことの必要性和重要性を認識できる。ことばの発信者と受信者の共存、共生、協力の時代である。

特集「コミュニケーションの基礎・基本」

コミュニケーションの基礎・基本 を問い直す

森住 衛

(大阪大学教授)

1. はじめに どの段階での基礎・基本か

トマス・マンの箴言の一つに「たとえ悪口や罵倒でも沈黙よりましである」というのがある。これを本稿でとりあげる「コミュニケーションで何が基礎・基本か」という点からみると、生徒が「ひきこもり」のような状況下では、とにかく話を交わすことが基礎・基本であるとなる。では、もう一段階進んで、なにがしかの話を交わしたとしよう。そのとき声が小さかったら相手に聞こえない。筆者の勤務校の学生の2分間スピーチを聴いていて最近とみに感じるのであるが、5人に1人の割合で声が小さい。これでは内容がよくても相手に伝わらない。このような状況で基礎・基本は何かとなると、声の大きさである。次に、声の大きさもよしとしよう。この段階で問題になるのは話の内容である。これも次元によって異なるが、意志疎通の究極的目的を考えると、あいさつや道案内も大切であるが、内容に気づきやインパクトがあるかどうかということが最も大切である。メッセージ性があるか、つまり、聴くに値する内容があるか、話すに足る内容があるかということになる。このように、基礎・基本の議論はいろいろな段階や取り上げる角度で変わってくる。中学校で行っている英語教育はすべて基礎・基本である。小論では、2002年から「週3時間」になる状況にあって、このすべて大切なもののうち、何が相対的に欠けているかという視点から、最重要なものは何かを考えてみたい。取り上げる角度は筆者が現在最も気になっている3点である。

2. 知識や技能だけでなく観点も重要

一般に「基礎・基本」というと、文型・文法や語彙、発音などの言語材料および場面や機能など言語活動が対象になる。これらは具体的に取り出しやすく、分量も限定されているので、扱いやす

い。しかし、これら知識や技能に加えて、観点の「基礎・基本」もなくてはならない。ことばの観点とは、ことばと人間や社会との関係をどうとらえるか、英語という言葉語をどう考えるか、英語を使う際にどのようなスタンスをとるかなどのことばのとらえ方・見方である。一言で表すと言語観である。これは精神に関することで、その内実は広範囲・多岐に及ぶ。具体的にいうならば、次のような例になる。いずれも上記の知識の「知る」や技能の「使う」に対して、「判断する」に関するもので、この認否によって言語観が分かれる。

- ある国や地域に行ったら、あいさつぐらいはその国や地域のことばを使う。
- 国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである。
- 少数・先住民族語は消滅しても仕方がない。
- ことばの学習は役に立たなければ意味がない。
- ことばの教育はスキルの教育である。
- ことばの教育は人間教育に資するものでなければならない。
- 英語が話せるということは「国際人」である。
- 英語は大言語であり、最も便利なのでみんな英語を学ぶのは当然である。
- 日本式英語を堂々と押し進めるべきである。
- Queen's English や General American の発音のみが正当で美しい。
- 在日外国人が人権の問題で公の場に立つようなことがあったら、その人の母語を使えるように保証すべきである。
- 日本も英語を公用語にした方が「国際通用力」が増す。

NEW CROWN では、この言語観に関わる問題を題材や教科書構成、文法の扱いなどに打ち出して

いる。見返しの 世界の「こんにちは」もいろいろな言語に関心をもつという言語観に係る。伝統的な登場人物の配置も然りである。題材では 1 年 7 課の “English and Japanese” は学び合いである。母語を大切にするという点から 2 年 8 課の “Ainu”, 9 課の “The United Kingdom”, 11 課の “Kenya” などを取り上げている。3 年 3 課の “Korea”, Let’s Read 3 の “Language Life of a People” などこの種の言語観を取り上げた教材である。1 年の Kato Ken という日本名の順序もこの言語観に係る。言語の使用が個人や民族の自立性 (Identity) に関わるからである。このように、「判断する」場合にはある立場や観点をとる。ここには価値観が伴って、その善悪、正邪は簡単には決められない。しかし、ここを検証しておかないと、知識や技能は真には生かされない。いや、間違っ使われることもある。英語に堪能で反国際的になるなどはこの典型である。この意味で、観点の「基礎・基本」は他の 2 つの領域以上に重要であるともいえる。

3. 今も昔もやはり語彙と文法

英語教育で英語の何を扱うかについて、表面に出ている英語の諸相という角度からみると、音、文字、語彙、文法、表現の 5 つに分けられる。ここでいう文法とは広義であり、文型や語法も入る。表現とは、Good morning. や See you. など特別な言い回しとしての挨拶や熟語としてそのまま覚えるものである。さて、この中で、コミュニケーションの基礎・基本として何が重要かということであるが、この 5 つともすべて大切である。しかし、その中でも特にとると、語彙と文法を挙げたい。

まず、語彙であるが、周知のように新学習指導要領では 900 語になった。これはこの指導要領の理念になっている「ゆとり」を考えれば、そして、2002 年からこれまでの実質「週 3 + 1」から「週 3」に逆戻りという現実をみれば、わからないわけではない。いや、後者の議論を本格的にすれば、現行の 1,000 語の 4 分の 1 を減らさないと、授業時数に比例しない。しかし、もう一方でコミュニケーションの基礎・基本ということで考えると、相手との意志疎通をはかれない場合の最も大きな要因は、その単語を知らなかったからということ

は自明の理である。筆者は中学校で最低 3,000 語は出したいと思っている。そんなに出すと不消化になるという意見もあるが、忘れる単語があつて当然である。しかし、興味があれば、それぞれ個人個人によって異なるが、生徒の脳裏に残るはずである。インプットが少ないとアウトプットも少ないというのも、誰もが知っている事実ではなからうか。さらに、これは言語観に通じることであるが、語彙の制限は精神の制限につながる恐れもある。教科書の 付録 や自作のプリント教材で、できるだけ多くの語彙を生徒の前にさらしていただきたい。

次に文法であるが、発話を多少とも意味あるものにするために、最低限のことばの仕組みを知っておくことはコミュニケーションの原点である。文法や文型をしっかりと理解して駆使できるまでにしておかないと、発話の程度も幼稚なものになる。生徒が文法・文型をしっかりと理解できることを学校の英語教育で保証したい。NEW CROWN が巻末で 文法のまとめ を設けているのはこの所以である。練習問題もコミュニケーションの要素をもたせながら文法・文型の定着をはからねばならない。近年、文法が忌避される状況にあるだけに、あえてその重要性を指摘した次第である。

なお、語彙のうちどんな語彙が基礎・基本かなどのように、この 5 つの諸相のさらに細かい分野の基礎・基本の議論があるが、これに関しては前号の拙稿のうち 言語材料の基礎・基本 を参考にしていきたい。

4. 「聞く・話す」に加えて「読む・書く」も...

培うべき技能は 4 つある。この中で何が基礎・基本か。これは難問である。なぜなら全部必要だからである。あえてこの 4 つの中から最も重要なものは何かを取り出してみたいが、その前に、もう一つの技能が基礎・基本であることを述べたい。Listening・Reading・Speaking・Writing の根底にあるのは Thinking である。受信であれ発信であれ、Thinking なしには内容のあるコミュニケーションができない。この意味では Thinking も基礎・基本である。言語活動に Thinking を入れるためには伝達される、あるいは伝達することばにメッセージ性がなければならない。つまり題材がしっかりし

ていなければならない。

さて、4技能に戻るが、新学習指導要領では「聞く・話すなどの実践的コミュニケーション」という言い方を用いて「聞く・話す」活動を重視している。これは日本の英語教育で長い間この2つの技能が軽視されがちであったがための、いわばテコ入れである。確かに最近の国際化により、「聞く・話す」機会が多くなった。また、言語学習は「聞く・話す」から始まるともいえる。その点では、「聞く・話す」が重要であるということは頷ける。問題はバランスである。筆者は現在のバランス、すなわち現行指導要領でいう「外国語を理解し、表現する能力の基礎を培う」という4つのバランスを重要視したい。逆にいえば、「読む・書く」能力をこれ以上落とすとはならない。さらに言えば、「読む」ことは「聞く・話す」活動の基礎・基本になる。きちんと読んでいないから「聞く・話す」ことができないのである。また、「聞く・話す」活動は最近ALTの導入などで向上してきたとはいえ、まだ習熟するためには不十分である。もちろん、場面や機能の点から教科書でもきちんとおさえておく必要があるが、この指導は今の「週3+1」の状況でも本格的に行うことは難しい。「聞く・話す」活動が本格的に基礎・基本になるのは母語習得や第2言語習得のような状況下で効果がある。

「読む」活動は音読と解釈である。音読は最近ではコミュニケーションではないとされ、あまり行われていないが、これがそもそも基礎・基本の欠如につながっている。解釈は、これまで日本語訳を中心に行われてきたが、これは基礎・基本ではない。全体の意味をおぼろげながらでもつかむこと、すなわち大意を読みとること、これが本来の基礎・基本であろう。「書く」活動は句読点や綴りから自由英作文まで多岐にわたっているが、これとて不十分である。特に、自己表現する際の談話構成能力が欠けている。「書く」活動はスピーチをしたり、口頭の報告をする場合に、どのような能弁者でも必ず一度は通過している活動である。「書く」ことによって思考を深め、内容を充実させれば、本来のメッセージ性の高い口頭のやりとりになる。近年のe-mailでも「読む・書く」コミュニケーションが先行している。「聞く・話す」を低く見るつ

もりはないが、その力を強めるためにも、また、日本の英語教育のように「外国語教育としての英語教育」のもとに「学校で週3時間しかもてない」状況で、それも「クラスサイズが30名~40名」という条件を考えれば、つまり、本質的にも実際的にも「読む・書く」が4つの技能の基礎・基本となる。

5. おわりに 困難な状況にこそ本質がわかる

コミュニケーションにおける基礎・基本について、3つの角度から述べてきた。冒頭に述べたいいろいろな視点や角度を踏まえると、この他にも様々な議論ができる。最近の学説で言われている「4つのコミュニケーション能力」(Linguistic Competence・Socio-linguistic Competence・Discourse Competence・Strategy Competence)や筆者がしばしば使う「英会話の3要素」(意欲・内容・言語能力)、あるいは「3つの基本活動」(朗読・模写・暗唱)などである。これらについては紙幅の都合で割愛したが、全体を通じて肝心だと思われることは、現実を見て基礎・基本を考えること、そして、基礎・基本は直接的に役に立つことではないことの2つである。前者は、状況や実態を考えないと基礎・基本は上滑りするということである。さらに広げていえば、基礎・基本は学校によって、生徒によって異なる可能性が多分にあるということである。後者は、あまりに近視眼的にものごとをとらえてはならないということである。その点では買い物ができるとか、電話の応対などにのみ集中すると危うい。このような直接的なことは、その場に居合わせると慣れてくる。もっと根元的なものが基礎・基本であるように思われる。

また、今回、すべて重要なものの中からあえて選ぶとどうなるか、というようにせっぱ詰まった状況に我が身をおいてみて改めて感じたのであるが、基礎・基本を考えていくと学校で行われる英語教育の本質は何かより鮮明に出てくる。やや違った次元でいうならば、「週3」という状況を迎える中で余分なものは何かと考えていくと、重要なものが浮かんでくるように感じた。ものごとは困難な状況の中にこそ本質がみえてくる、というのが真実ではなかるうか。

特集「コミュニケーションの基礎・基本」

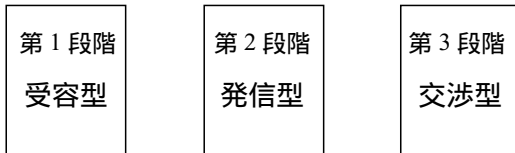
コミュニケーションの基礎・基本 と教科書

齋藤 栄二

(平安女学院大学教授)

1. 英語を使いこなせる力

英語を使いこなせる力については、私は次の3段階があると考えています。「相手の言うことがわかる 自分の考えを述べられる 相手と不一致点があっても交渉して一致点を探りつつ行動に移せる」。これをさらに単純化すると次のようになります。

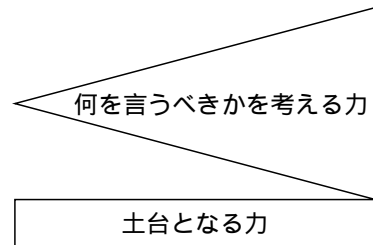


この3段階のうち、私たちの行ってきた英語の授業は、どの辺まで生徒を持ってきているのでしょうか。第1段階の受容型というのは、私たちの英語教育では最も長い歴史を持っています。それに比べれば、発信型といってもごく最近のものにすぎません。ましてや交渉型などというのは、私も最近言い始めたことです。その用語さえまだ馴染んでいないでしょう。もっとも最近では、ディベートなどをやる英語のクラスも出てきました。それはそれで良いのですが、日常的にアメリカやイギリスで暮らしてみてもすぐ分かるのは、日常の言語生活の場ではめったにディベートなどしないということです。むしろ相手の考えを聞き、こちらの考えを述べて相寄りながら、ひとつの方向を探っていくということの方がずっと多いのです。そしてそういう交渉力の方が、はるかに実際的で有効なのは、日本語の場合を考えても極めて明白でしょう。

2. 考える力

それでは、第1段階から第2段階、第3段階にいくにつれて要求される力というのは、どのようなものでしょうか。

第1段階 第2段階 第3段階



土台となる力の中心は文型駆使能力です。しかしそれがいくらあったとしても、自分の考えにのっかって、言うべきことがなければ無に等しくなります。私はこの「土台となる力」と「何を言うべきかを考える力」を合わせて、これからの英語の力の基礎・基本だと考えます。

そしてむしろ「何を言うべきかを考える力」こそが、21世紀に生きる生徒に身につけさせてやらなければならない力の、メイン・パートだと考えています。今、教科書を世に出すとすれば、そのことを配慮しないわけにはいかないでしょう。そこを押さえて初めて、「21世紀に生徒とともに生きる教科書」といえると私は考えます。

3. 題材

私たち NEW CROWN の教科書編集陣は、そのことを意識した教科書づくりに努力を傾注してきました。私たちはそれを「題材重視」という言い方で表現していますが、そのことは NEW CROWN の伝統として今や、大きな柱となっており、しだいに先生方の支持を得るようになってきました。

私たちは「題材がよいのは結構なことだ」などと単純に言い切っているわけではありません。「本当のコミュニケーションの力を伸ばすのなら、英語を使うときに考える力は欠かせない」「考える力を伸ばすためには、考えさせる要素をもつ

た題材を準備しなければならない」という考え方をしているのです。この考え方は、これからの21世紀に使われる教科書の中にも、十分に生かされていくものと思います。

NEW CROWNの題材の扱いの特徴を、現行の教科書から例を挙げて説明しましょう。まず、私たちは題材の中でも、ことばそのものについて考えるものを特に重要だと考えます。教科書の中に散見される、ことばについて考える内容を含んだ文を次に示しましょう。

I teach Japanese to Tom. Tom teaches English to me. (1年 p.48)

Now Ainu teachers give their people language lessons. The language lives again. (2年 p.55)

In Wales they have their own language. (2年 p.60)

Kenya became independent in 1964. Now Swahili is an official language. But English is still popular in Kenya. So some people speak three languages, their mother tongue, Swahili and English. (2年 p.79)

Some people in Canada speak English. Some people speak French. Both are official languages. (3年 p.10)

I am interested in the Korean language. Korean is similar to Japanese in some ways, for example, in word order. (3年 p.15)

Language is the life of the people who use it. (3年 p.83)

私たちは、ものを考えるときには何を媒体としているのでしょうか。それはことばです。ことばという媒体が無くては、ものを考えることなどできるわけがないのです。今あなたは何を考えていますか。その考えていることを目の前の紙に書いてみてください。それはおそらく日本語として書き出されるでしょう。そうすると、私たちの考え方は日本語の枠の中で行われているということになります。日本語を使いつつ、日本語を超えて思考をするというのは事実上不可能です。そういったことばの使用の長い歴史の中で、あなたというアイデンティティーが創られていきます。これは立派にひとつの文化と呼べる世界です。

続いて英語ではどうでしょうか。英語でも同じことが起こっています。英語で生活している人々は、英語の枠の中で思考作用を展開します。これ

も日本語とは違った巨大な文化圏を形作っています。続いて教科書には、韓国語が出る、ウエールズ語が出る、スワヒリ語が出る、ということになっています。私たちは、よく異文化理解ということに口をしますが、言語こそが星の如き異文化体の星雲なのです。

英語の教育は、ことばの教育です。ことばの教育なら、それぞれのことばの持っている異文化性に生徒の目を開かせたい。そういう考え方に沿って題材は準備されています。(もっともそれが題材準備のすべてではありません。)

いずれにしても、最初から上に述べたような考え方を、理論として生徒に説明する必要は全然ありません。それは教師として知っておくべきことです。あとは教科書の中にスパイラル式で出てくる教材に、生徒を十分に触れさせることです。そういった中で、教師は時折タイミングを見て、ことばとそれを話す人間との関係について考える機会を与えることです。そういうことを可能にする題材の準備を、私たちは心掛けてきています。

4. Personal Involvement 型のすすめ

私たちは2.で述べたような意味において、考える力を伸ばす仕掛けを教科書に位置づける努力をしてきました。それは色々な形で教科書全体にちりばめられています。決して生徒に無理はさせないように配慮してありますが、そういう配慮の上に立って、少しずつ少しずつ、機械的な応答から自分の考えをベースにした応答へもっていく exercise を、コミュニケーション活動の中に位置付けようと努力しました。

例えば、あるレッスンを讀んだとします。その後で exercise があります。その exercise の内容には、Personal Involvement 型と Fact Finding 型とがあります。

Fact Finding 型とは、教科書本文の中から答えを探すような問いをいいます。例えば Martin Luther King, Jr. の話ですと、「彼の I have a dream という演説はいつ行われましたか」「警察官が Rosa Parks に “Move to the back” と言ったとき、Rosa Parks はどうしましたか」といった類の質問です。これらの答えはみな、教科書本文に書いてあります。誰が答えようと、それはみな同じ答えになりますが、この型の exercise も、基本的な練

習として重要です。

Personal Involvement 型とは、文字通り一人ひとりの考え方が求められるタイプの質問です。例えば、「この課全体を通して印象に残った文を、本文から抜き出してみよう」は、Personal Involvement 型の質問になります。この質問に答えるためには、恐らく生徒は次の3つの知的段階を通らなければなりません。

(1)もう一度その課全体を読み直す。

この時、「どういう意味のことが書いてあったか」という英文解釈的な読み方ではなく、この課全体として「筆者は何を言おうとしているのか」というように、筆者の考え方の価値体系を知ろうとする読み方になります。

(2)その上に立って、全体の中でキーポイントとなっている文はどれなのかを、改めて探し直す。

これは単なる英文解釈から抜け出して、読書の持つ本来の姿に迫ることになります。

(3)自分の考えを述べ、他者の考えを知る。

例えば、We must fight to take any seat on bus. をあげる生徒も、He died, but people will long remember his words and thoughts. をあげる生徒もいるでしょう。どうして違ってきたのか。その理由は何なのか。話しあってみると、読み取りの質はいっそう深くなります。

大事なことは、これらのプロセスを経て、生徒は自分の頭を使って「考える」ことを始めるということです。その考えの質は、自分の意見や見方、考え方にかかわってくるということです。それが、本当の意味で実践的コミュニケーションの力を伸ばす道につながっていくのです。なぜなら、自分の考えなしで会話でもコミュニケーションでも、続行することなど全く不可能だからです。

〈新教育課程対応〉

これからの英語教育・国際理解教育は「知る」学習から「行動する」学習へ！

小・中・高を結ぶ

英語教育と総合的な学習

荒木英二・後藤英照 [編著] A5判・220ページ・2,600円

●特 色

1. 他校種理解

実践的なコミュニケーション能力の育成は、小・中・高の学習の積み重ねから。他校種の内容を知るための貴重な情報を提供。

2. 温故知新

これからの英語教育・国際理解教育は「知る」学習から「行動する」学習へ。何が大切で、何を改めるかを考える資料を提供。

3. 豊富な事例

小学校の英語学習・国際理解、中学・高校の必修・選択外国語やこれらを生かした「総合的な学習」など、詳細で豊富な事例。

●内容と構成

第I章●国際化に対応する教育

第II章●中学校・高等学校外国語教育の改善

第III章●国語理解を中心とした「総合的な学習の時間」の指導

第IV章●小・中・高を結ぶ英語教育をめざして

第V章●小・中・高における英語指導の実践事例

第VI章●小・中・高における「総合的な学習」の実践事例

中学の入門期にも便利です。

小学校 英語・国際理解教育用

First CROWN ビデオソフト

First CROWN 編集委員会 [代表: 森住 衛] 編

全4巻 (教師用指導書つき)

(20分×4巻)・(B5判・64ページ) 15,000円

WORK BOOK B5判・32ページ・300円

三省堂 (価格は税別)

特集「コミュニケーションの基礎・基本」

コミュニケーションの基礎・基本 定着のための授業

重松 靖

(東京都小平市立上水中学校教諭)

1. はじめに

NEW CROWN の代表著者である森住衛先生が、以前、「コミュニケーションにおいて必要なことは、相手に伝えたい内容を持っていること。次にその内容を伝えたい欲求があること。最後にそれを伝える手段である言語を知っていること」と言ったことがある。まさにその通りであると思う。

では、そういった力を持つ生徒を育てるには、どんな授業を展開していけばよいのか考えてみたい。

2. Teaching English in English

生徒にとって一番身近な英語の授業を、コミュニケーションの場にしてはどうだろうか。授業の始めと終わりの挨拶は英語でしているが、授業そのものを英語で進めている先生方はまだまだ少ないのではないか。

挨拶の後に、What's the date today? / Is anybody absent today? / Why is he or she absent? Oh, that's too bad. / You were absent yesterday, but are you all right today? That's great! / I watched a baseball game last night. It was exciting! Did you watch the game? などと会話してみたり、classroom English を多用するのもいいだろう。また、新しい文法事項や構文を英語で導入したり、教科書本文の内容を oral introduction で導入することもできる。その際注意したいことは、form を定着させるドリルの段階は別として、文法上の誤りをいちいち訂正したり、言い直しさせたりしないこと。What time did you get up this morning? に対して Seven. と答えられればいいではないか。

英語をコミュニケーションの道具として使っていれば、How are you? と生徒に聞かれ、I don't feel so good. と答えたときには、自然に That's too bad. と言ってくれるようになるはずだ。

3. 沈黙は金ではない

英語で生徒に質問したとしよう。生徒は答えられないと mysterious Japanese smile を浮かべて黙り込んでしまうのが普通である。この笑いは「意味のない笑い」であって、暖かみを与えコミュニケーションを円滑にする働きなどまったくない。私は生徒に、「沈黙するな。自分が今どういう状態にいるのかを英語で表現しなさい。そうでないと、コミュニケーションが中断してしまう!」と言っている。つまり、

* 相手の言った英文が聞き取れなかった

Pardon? / Excuse me? / Please say it again. etc.

* 質問は理解できた、今答えを考えている

Well..., / Let me see.

* 質問の意味がまったく理解できない

Sorry, I don't understand you.

* 答えを忘れてしまった

Sorry, I forgot.

生徒数の減少で学校でも空き教室が増えてきた。本校では、3年前から「英語科教室」を設け授業を行っている。上記のような表現や、Excuse me. How do you spell ~? / Excuse me. How do you say ~ in English? / Thank you. You're welcome. など生徒が授業の中で使いそうな表現を教室の壁面に掲示している。未習・既習に関係なく、1年生でも使う生徒は多い。

4. 評価の工夫

人間だれでもほめられれば嬉しいし、誤りを指摘されれば嫌なものである。われわれ教師は、ともすると文法的な誤りのみを評価の規準とし、内容や意欲を評価しないことが多い。生徒に積極的に英語を使わせようとするならば、この活動(問題)では何を求めているのかをはっきりと生徒に示し、その観点からのみ評価したり、一つの活動

(問題)に対して複数の観点から評価すべきではないだろうか。

たとえば、「書くこと」の評価の観点を私は、要求された課題を達成できたか、意味の通じる英文か、文法的に正しい英文か、語彙や表現・内容は豊かか、の4点にしている、また「スキット活動」の発表においては、適切な音量か、お互いの目を見ていたか、発音やリズム、イントネーションが自然か、文法的に正しいか、演技力や独創性はどうか、の5点としている。

5. あたたかみがある言語活動

コミュニケーションを機械的な情報の授受に終わらせず、お互いの人格を認めあい、人と人があたたかくふれあう場としたい。そのためには、機械的なドリルの後に、「その人らしさ」がでるような題材で言語活動を展開する。

たとえば、Book 1, Lesson 1 [2] (基本文: This is my ~.) では、機械的な口頭練習の後に、小さく切った画用紙を配り、今一番大切にしているものや気に入っているものを絵にして描かせる。その後、ペアやグループになり、次のように発表させる。

Hello. My name is Ito Koji. This is my family. Thank you.

1年の初期であり多くの英語を望むことはできないが、短いなりにも立派なメッセージが込められている。私は、全員を教室の前に出させ、ビデオカメラを教材提示装置代わりにして、絵をテレビ画面に映し発表させたが、教室中があたたかな雰囲気になった。

6. 個人の視点から題材を問い直す

冒頭の森住先生のことばからもわかるように、豊かなコミュニケーションの担い手は豊かな人間性を持っている。幸い、NEW CROWN は題材内容が豊かで、さまざまメッセージを我々に伝えてくれる。それらをただ受動的に受け入れ、知識として蓄積させておくだけでなく、常に自分と関連づけて考え直させたい。

たとえば、Book 1, Lesson 1 “My Name Is Kato Ken” では生徒自身が自分の名前を Kato Ken 方式

で言うのか、Ken Kato 方式で言うのか考えさせる。また Book 2, Lesson 4 “Computers in Future Schools” では、生徒それぞれが考える未来の学校、理想の学校を発表させる。

昨年度3年生を担当したが、Lesson 4 “A School Trip to Hiroshima” を学習したあと、佐々木禎子さんに関するNHKの番組を生徒に見せた。数日後、私のクラスで何人かの生徒が突然折り鶴を折り始め、クラス中に広がった。「何かをしなくちゃいけない衝動に襲われた。でも何をしたらいいのかわからないので、とりあえず鶴を折る」とある生徒が話してくれた。クラスの中には、「安っぽいセンチメンタリズムで折りたくない」といって協力しない男子もいたが、それでいいと思う。とりあえず、一人ひとりが自分と関連づけて考えた結果であるわけだから。

7. コミュニケーションのルールを教える

外国人とのコミュニケーションでは、文化の違いもあり、日本では自然なことでも、相手に不愉快な思いをさせてしまうこともある。当然その逆もあるはずである。

こういった事柄についても、意図的・計画的に教える必要がある。たとえば、Book 1, Lesson 5 で人称代名詞 he, she を学習した後に「he や she はその場にいない人を指すことばであって、その場に本人がいるのに She is from the USA. などと言うのは失礼だよ」と教えたい。ただ、われわれ英語の教師でもわからないことが多いので、ALTの助けが必要になってくる。岩波新書 No.215 J.V.ネウストブニー著『外国人とのコミュニケーション』も参考になる。

8. おわりに

以前、アメリカ人が人前で堂々と意見が述べられるのは、小学校の低学年から国語(英語)の時間に Show and Tell を通して話す訓練をしているからだ、と聞いたことがある。コミュニケーション能力の基礎・基本を教えていくためには、他教科との連携など広い視野で考えていかなければいけないということを、あらためて実感する。

生徒と創る Communicative Class

稲岡 章代

(兵庫県姫路市立神南中学校教諭)

1. はじめに

2002年から実施される新学習指導要領のキーワードの一つに、「実践的コミュニケーション能力」がある。授業を通して、どのように生徒の「実践的コミュニケーション能力」を育てていくのか。本稿では will(NEW CROWN Book 2, Lesson 4) を例にとり、授業実践を述べる。

2. 授業過程

TEACHING PLAN

1. Greeting
2. Warm-up
3. Review
4. Presentation of the New Materials
5. Check-up
6. Explanation of Grammar Points
7. Mim-Mem
8. Copying
9. Oral Practice
10. Introduction of the Text
11. Reading
12. Consolidation
13. Closing Address

3. GREETING, WARM-UP

授業は Good morning, everyone! で始まり、その日のニュースや各教室の「学級 English 日めくりカレンダー」を話題にする。英語で簡単なおしゃべりをした後、クラス全員で回し読みをする CHANT へ進む。この辺まで来ると生徒の気分は英語バージョンとなり、授業への準備体制は万全となった。

4. REVIEW

(1)CHAT

ペアで CHAT を楽しませた。ペアは固定せず、常時「クラスの誰とでも CHAT を楽しめるように」を目指す。本時のタイトルは “Where were you at seven yesterday?” 自分から積極的に話を展開しよう、相手の話に反応しよう、の 2 つに重点を置き、相づち、聞き返し、そして簡単な感想を伝えるなど、話を続けるのに役立つ表現、例えば

- | | |
|------------------------------------|-------------------|
| • Uh-huh. | • How about you? |
| • That’s nice / great / wonderful. | • I see. |
| • That’s too bad. | • Pardon? |
| • I can’t believe it. | • I think so too. |

などが自然に口から出るように指導をした。また一問一答でなく、できるだけ多くの英文を言って、話を続けるようにさせた。約 1 分間の CHAT の後、パートナーの話した内容をまとめてクラスにレポート（発表）させた。CHAT の後にレポートがあるため、生徒たちの意気込みも一層活発になる。

(2)QUIZ

REVIEW の 2 つめの活動として、動詞の過去形を使ってのクイズを出題させた。生徒の出したクイズを一つ紹介する。

Student A : Where was I yesterday?

I saw a white horse.

I bought “batoukin”.

I ate sheep.

I visited Suho’s house.

Where was I yesterday?

Class : Were you in “Mongoru”?!

Student A : Yes, I was!

5. PRESENTATION OF THE NEW MATERIALS

will の導入。この日は 6 月上旬だったので、

「父の日」の話題を使った。(話題がそのクラスに適しているかを前もって確かめておく必要がある。)動詞の現在形の文と対比しながら、自然にwillの入った文が導入できるように配慮した。以下、ORAL INTERACTION に使用した文を表記する。

T : Do you like Sundays?
 Ss: Yes, I do. / No, I don't.
 T : I love Sundays. I can relax on Sundays.
 What do you usually do on Sundays?
 Ss: I... (各自、返答する)
 T : I see. I usually go shopping. Next Sunday I will go shopping too. (全体に) Who will go shopping? Raise your hands. (何人かが挙手。その一人に向かって) Do you like shopping?
 S1: Yes, I do!
 T : Me too. (クラス全体に向かって) I will go shopping next Sunday. Please say, you
 Ss: You will go shopping next Sunday.
 T : (ジェスチャー混じりで) Listen carefully. I will go shopping next Sunday. (CUEを出す)
 Ss: (より大きな声になって) You will go shopping next Sunday.
 T : Good. I will go shopping next Sunday. Why? (生徒、首をひねって考える) I will buy a present for my father. Why? (生徒の返事を期待する)
 S2: (ひらめいた様子で) Birthday present!
 T : Ah, I will buy a birthday present for him?! That's a good idea, but sorry, his birthday is in February. Say why. (再び生徒に考えさせる)
 S3: Father's Day!
 T : That's right! I will buy a present for my father, because Father's Day will come soon. I will buy a blue tie for him. (一人一人の顔を見ながら、少しゆっくりと) Will you buy a present for your father?
 Ss: (ほとんどの生徒が) No.
 T : No? Really? How about you, S4? Will you buy a present for your father?
 S4: (照れ笑いしながら) No.
 T : No, you will not?! Oh, poor Father!

この後、内容理解のチェックのためにQ&Aを行った。

次に一人の生徒に簡単なインタビューをして、次の2文を板書した。

Takami plays volleyball every day.
 She will play volleyball next Sunday too.

ここで生徒は初めてwillを文字で見る。ORALで練習できているので、「ああ、willはこう書くのか!」という表情である。簡単にwillについての説明に入る。「この2つの文を見て、気がついたことある?」と質問を投げかけ、ペアやグループになり、文法事項の発見に取り組む。文構造のルールを発見できた時は、みんなで“I see!”となる。生徒がにっこりする一場面である。

6. ORAL PRACTICE

学習活動から言語活動に発展できるように、単純な練習からダイナミックな内容のものへと発展させていく。

- (1)まず生徒にとって身近な先生の予定を、絵で表したプリント(次頁参照)を作成し配布。十分口頭練習した。
- (2)ペアになり自分の次の日曜日の予定について会話させた。この時も互いに相手の言ったことに反応して、話を続けさせるように指導した。
- (3)“What are your plans for the summer vacation?”という題の即興会話の練習。まずJTEとALTによるモデルをカセットテープで聞かせた。次にペアで、お互いの夏休みの計画について2~3分しゃべらせ、即興会話のシミュレーションとした。さて、実際にクラスの前に出ての即興会話では、その場で相手を選ぶ。これは生徒に人気のコーナーで、どこかでクラスのみんなの笑いを取ろうと意気込む姿勢が見られ、授業も盛り上がりやすい。







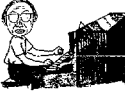

7. INTRODUCTION OF THE TEXT, READING

話題を、教科書本文の「未来の学校」に切り替える。ピクチャーカードや手持ちのコンピューターを見せながら本文の導入を行った。教科書の内容に加え、生徒が興味のあるような話題も取り上げた。音読指導・内容確認と進むころには、生徒は「未来の学校」についてイメージを持つことができていた。

Plans for next Sunday

NEXT SUNDAY

Next Sunday,
 in the morning Mr A will
 In the afternoon he will
 In the evening he will

	morning	afternoon	evening
			
			
I			

(6. ORAL PRACTICE(1)で使用：身近な先生の日曜日の予定を絵で表したプリント)

8. CONSOLIDATION

本時のまとめ。Listening, Speaking, Readingの活動から、「自分の考えを英文で書き表す」Writingへと発展させる。

プリント(次頁参照)を配布し、6つの質問を与えた。生徒は興味のある話題を選択し、ペアあるいはグループで話し合った。友だちの発言を聞きながら相づちを打ったり、同意・驚き・感動などの意向を示したりして、英語で自由に語らせた。生徒は話し合いながら、「これはいい!」と思ったことをメモに取り、後でこのメモを参考にして、各自の意見やアイデアを英文でまとめていった。プリントの提出は次の授業とし、発想豊かに取り組める時間の保障をした。以下、生徒たちの「未来の学校」についての代表的な意見を紹介する。

How will students go to school?

- Students will go to school by car. The car will be a special student-car.
- Students will go to school by foldable bike. They will fold them and carry them in their bags.
- Students will go to school by flying desk. The desk has a computer and disks.
- Students will come to school by "Dokodemo-door."

They will not be late for school.

What will students study at school?

- Students will study about technology. They will make a good environment for the world.
- Students will study about solar power. They will help the Earth.
- Students will study about nature. They will live in the beautiful nature.

What will students eat for lunch?

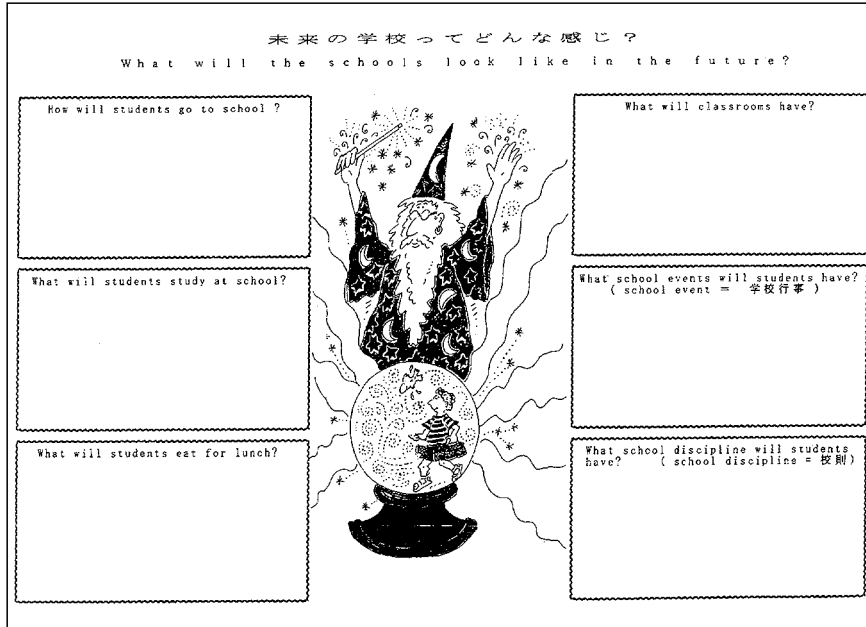
- Students will eat a good balanced meal in pill form.

What will classrooms have?

- Classrooms will have big screens. They will talk with people on the screen.
- Classrooms will have a special carpet. It will control the temperature in the room. It will keep the air clean.
- Classrooms will have a "Dokodemo-door." They will go to many countries.

What school events will students have?

- Students will have a space trip. They will make



(8 . CONSOLIDATION で使用 : 未来の学校についてのプリント)

good friends in the space.

- Students will have a computer programming contest. The winner will get a good computer as a prize.

What school discipline will students have?

- If students do not send their homework by computer, they must go to school and study with teachers.

9 . CREATIVE WRITING

授業後、生徒は “ What will I do in the future? ” というタイトルで Creative Writing に取り組んだ。生徒は自分の人生設計を、自由に英文で表現して楽しんだ。

この活動に際し、未習の表現である「～歳の時」と「～になりたい」を紹介し、university や marry , license など、簡単な words list も与えた。生徒の作品を一つ紹介する。

What will I do in the future?

- I will live in Kobe when I am 20.
- I want to live near the harbor of Kobe.
- I like the sea. I want to see the sea every day.
- I will go to a university when I am 18.

I will join the medical department.

I will learn medical science there.

I want to be a doctor.

I will go to England when I am 23.

I like England.

I want to see the Tower of London.

I will marry when I am 22. Wow!!!

I will have 2 children when I am 30.

I will make a picture book for my children.

I will write books for them too.

I wish that I will have 2 daughters.

Their names will be “ Nami ” and “ Rina. ”

Maybe they will be beautiful girls!

I will enjoy my life in the future!!

10 . おわりに

「実践的コミュニケーション能力」の育成には、Listening , Speaking , Reading , Writing の 4 技能の有機的な統合を図った授業を通して「実際にやって身につける」ことが大切である。生徒と教師がどんな授業を創っていくか、ここに醍醐味がある。生徒には無限の可能性がある。また私たち教師にも無限の可能性がある。夢ふくらむ未来へのチャレンジが、授業づくりからスタートする。

Making up is hard to do

Thomas Hardy [Professor, Tamagawa University]

It all started out pleasantly enough. It was late and Hiro and I had visited a couple of favorite bars. We were at our third bar when the argument started. I think I raised my voice. Then Hiro raised his and interrupted me.

I shouted, "Shut up. I'm not finished."

"Yes, you are." He shouted back. "Especially if you are going to say such stupid things."

"Stupid things?"

"Yeah, stupid things."

"Well, they're not even close to as stupid as the things you were just saying."

"Oh." Hiro shouted. "Is that what you think?"

"Yeah." I said. "That's what I think."

"I'm not going to stay here and be insulted."

"Then go. No one's keeping you."

Hiro slammed his beer glass on the counter. Beer spilled out and hit the front of my shirt.

"You jerk." I screamed. "Watch out!"

Without another word, Hiro walked out.

The next morning all I remembered is that we had had an argument and that we had to make up. But how? The first time I called him all I got was his answering machine. "Ah, sorry about last night. Ah, how's your head?" A good start, perhaps, but not enough. Not nearly enough.

A couple of nights later I ran into Hiro at a local bar. "About the other night ..."

"I don't want to talk about it." He said and cut me off. "Just give me some space." Hiro said and moved to another stool.

"Well, well." I thought. "Space. OK, space he will get."

* * * * *

My response to the argument and Hiro's very different response started me thinking about the different strategies people use to make up. Was it me

being an American? Was it Hiro being a guy?

I started to find out by asking an assortment of Japanese friends and sending e-mail messages to some American friends. I asked them all the same basic question, "How do you make up with a friend when you've had an argument." There were a whole range of responses, but I started to notice a pattern.

One standard response from my friends was to take a principled stand. These people thought along the lines of "It's not my fault, so I'm not going to apologize." Robert's response is an example of this. "Thomas, what we're talking about is a matter of principle. Why should I apologize for something that isn't my fault? If I make a dumb mistake, of course I'll take responsibility for it and make an apology. But, hey, if it's not my fault, why say so?"

My friend Shoichi agreed. "Remember our argument over some baseball scores. I refused to back down and so did you. When we found the stats, I was right and you were wrong. If I apologize for being right, it makes a bad impression.

"Also, everyone should be mature enough to give themselves a while to cool off. How long? It's case by case depending on who you're angry with and what you're angry about. After a while, you will recognize who was responsible and you can go on from there without saying anything. It's just common sense"

Sarah had a slightly different common sense approach to making up. "An argument is nasty. Is it really worth fighting with a friend just to prove a point? I don't think so. It doesn't matter who is right and who is wrong. What's important is staying friends with friends. I say, sit down with each other over a quiet cup of tea. You can talk the matter over, recognize the possibility of fault on both sides, apologize to each other, and get it over with."

When I talked with Asako she agreed with half of

Sarah's thinking. She, too, believes that the important thing was the relationship between the two people. "I mean, you're friends. Friends. You've know each other for years. That's the principle." And she was all for a cooling off period after an argument. "Because, you see, if you're angry, you might say something that you don't really mean. Something that really hurts the other person. Let things sit for a while. Think about it. But sit down and talk about it? No. Analyzing feelings is not the way to do it. It's too cold. You're friends. You'll know when the matter is settled. You'll know."

I checked back with Robert on his feelings about this "let time heal the wounds" and intuitive approach to making up. "Yes, I can see the point. I disagree with it, but I can see it. I'm different. I need to get clear in my mind just what happened. Then, if there's a problem in the future, I can avoid it."

* * * * *

Once all the e-mails were in and the telephone calls made two patterns were clear.

One pattern concerned the relative importance of principles and people. Robert and Shoichi were in favor of standing up for principles. Asako and Sarah, on the other hand, felt that the relationship between friends was more important.

Gender was clearly operating here, regardless of cultural background. Being right is a guy thing. The male stereotype held, at least among my friends. My women friends valued the relationship more than the principle. They just wanted an end to the unpleasantness. The stereotype of a women being person-oriented held. Certainly this is not always true. Times are changing and the social roles of men and women are changing. But, in this sample, traditional gender behaviors and patterns seemed to hold.

The other pattern concerned the method of making up — talking things over, which was Sarah and Robert's position, or letting things quietly cool off, Asako and Shoichi's position.

In this instance, the responses fell into cultural groups, with the Americans being more analytic, and the Japanese being more intuitive.

The American response makes cultural sense in at least two ways. In the historical sense, the United States, and Western culture as whole, values clarity of expression, and analytic ability. These values underlie many Western approaches to technical and social problems.

A more particularly American take on the matter starts from the fact that the United States is a diverse country with people from many social, ethnic, and cultural backgrounds all living together, working together, and playing together. This diversity requires special skills for dealing with the inevitable disagreements. One skill that Americans have developed is the willingness to talk about differences. This is not neutral. From one angle, this is about openness and clarity. From another angle, this is about aggression.

The Japanese responses also make more sense if understood culturally. Japan comes from a historical tradition which valued deference to authority. Subtlety of expression was the desired communicative skill, both for its aesthetic value and for its ability to deflect undesirable consequences.

At a more everyday level, despite great social diversity, Japan presents itself as a homogeneous country. The sense is that talking about differences, which officially should not exist, is inappropriate. The shared cultural background should suffice. As in the American case, this assumption is not neutral. Positively, it requires that people listen carefully to what others are saying. Less positively, it is about hiding what you feel.

* * * * *

Hiro and I ran into each other a couple of weeks later. We made awkward conversation for a few minutes, then I asked, "Do you want to talk about it?"

"Talk about what?" He looked confused for a moment. "Oh, 'it'." He paused. "No. Not particularly. There isn't really anything to talk about, is there?"

It was my turn to pause for a second. "No, I guess there isn't. Want some of these peanuts?"

flag

森住 衛
(大阪大学教授)

今回は「旗」のうち国旗を取り上げる。国旗に使われるデザインや色はそれぞれの国の成立過程や国民・民族の興味や関心が映し出されている。

まず、英語圏の主な国旗を概観する。英国のユニオンジャックは、3つの「国」の聖人の名で知られる紋章を混合したデザインである。ここに至る過程は連合王国の成立過程そのものを暗示している。つまり、13世紀に使われていたイングランドの St. George & Cross (白地に赤の十字形)があり、その次に17世紀初頭にスコットランドの St. Andrew & Cross (青地に白の×字形)が加わり、最後に19世紀初頭にアイルランドの St. Patrick & Cross (白地に赤の×字形)が加わった。そうなるとウェールズはどこにいつしまったかという疑問が出てくる。これはまだ調べ切れていない。なお、この旗が the Union Jack と呼ばれるのは、イングランドとスコットランドが union になったときの王 James I の名にちなむ。Jack は James のフランス名 (Jacques) に由来する。

アメリカ合衆国の星条旗 (the Stars and Stripes) もこの国の歴史を物語っている。デザインは「合州国」の州の数を紅白の線条と左上の青地に白の星で表したものである。当初は、線条も星も13であった。線条の赤は母国イギリスを表すが、そこから独立しているという意味で白で分断しているといわれている。赤7本白6本の線の数州が増えるに従って増やされたときもあるが、現在は当初の13に戻っている。これに対して、左上の星の数は州が加わるごとに増えて、ハワイ州が加わった1960年以降は50となっている。

オーストラリアおよびニュージーランドは共に左上にユニオンジャックのミニ版を入れている。英連邦の一部であるという表示である。その他は青地に星(南十字星など)を入れているが、両者の違いは星の色と数である。カナダは、当初は州ごとの旗にユニオンジャックを入れていたが、1965年以降、統一国旗を制定した。両側に縦の赤があり、真ん中に白地に赤の楓の葉である。

日本の「日の丸」が頻繁に使われはじめたのは

明治以降であるが、この原型は古くからある。もともと「日出ずる国」と言われていたので当然である。たとえば、屋島の合戦(1185年)で那須与一が打ち落とした平家の軍扇の「紅に日いたしたる扇」(『平家物語』)は赤地に金色の日の丸を表していた。後醍醐天皇が武將たちに授けた紋章は白地に赤の日の丸のものである。現在の日の丸の最古のものと言われている。その後、軍旗として各所に使われ、秀吉時代の東南アジア向けの貿易船への用途を経て、幕末には「日本総船印は白地に日の丸のぼり職」と決められた。Encyclopedia Americana には 'In 1849, Japan adopted a flag showing the 2,500 year-old sun emblem of its emperor.' とある。最後の部分が言い得て妙である。

この概観でわかるが、英語圏の国では星の絵図を国旗に採用している国が3つある。ちなみに、Americana でとりあげている140の国旗のうち星は40以上に使われている。日本の場合は太陽である。韓国、「台湾」も太陽である。一般に、かつて狩猟・牧畜文化圏では星と月が使われ、農耕文化圏では太陽が使われる。狩猟・牧畜文化圏では夜の星や月が安堵の象徴であり、自分たちの居所を示す指針であった。灼熱の日光は日中の移動にはむしろ害悪であった。一方、農耕文化圏では、太陽の恵みは農作物成長の必須条件である。

国旗に対するイメージや使われ方についてはどうだろうか。紙幅の都合で星条旗と日の丸をとりあげる。まず、イメージであるが、周知のように日の丸には先の大戦時の影響もあって好ましいイメージをもたない人がいる。これに対して星条旗にはこのような反感はそれほど多くはみられない。国旗や国歌は、その国がもつ歴史的要因によってイメージが変わってくるのである。また、日本では日の丸に対して誓詞のような習慣はないが、アメリカ合衆国にはある。ここにも異民族の集まりの団結の確認を示す、それもことばで行うという合衆国の特色が出ている。ことほどさように、好悪、自由、呪縛など国旗に対する態度にもその国の歴史と文化がつきまとう。